

BUG / バグ

2008(平成20)年7月3日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督＝ウィリアム・フリードキン／脚本＝トレイシー・レッツ／原案舞台劇“BUG”脚本＝トレイシー・レッツ／出演＝アシュレイ・ジャッド／マイケル・シャノン／リン・コリンズ／ハリー・コニック・Jr／ブライアン・F・オブライアン（ブロードメディア・スタジオ配給／2007年アメリカ映給／102分）

……『エクソシスト』（73年）のウィリアム・フリードキン監督が、「妄想が暴走する狂気の世界」を描くと、こんな風に！ 血液を餌にして人体に寄生するバグ（虫）なんて、ホントにいるの……？ それは妄想と狂気の産物では……？ 私の大好きな美人女優アシュレイ・ジャッドがオールヌード姿まで披露してくれるが、それが妄想と狂気の世界の結末だけに少し残念。もっとも、この映画について、そんな見方は少し失礼かな……？

「妄想が暴走する狂気の世界」がテーマ！

この映画の謳い文句は「妄想が暴走する狂気の世界」、そして「人間が人間でいられなくなる」。プレスシートには、「ウィリアム・フリードキン監督最新作『エクソシスト』の伝説が遂に塗り替えられる」「人間の精神の限界に迫る、驚愕のストレンジ・スリラー」と書かれているから、いかにも恐そう。

Yahoo! JAPANの辞書を調べると、この映画のタイトルである「BUG」とは、「①半翅類の昆虫、虫、②微生物、病原菌、ばいきん、③（機械の）欠陥、不良箇所、（コンピューター）バグ（⇒DEBUG）」とある。

私はもともとこの手の映画は苦手だが、「これまでに何度も映画史を塗り替えてきた孤高の映画作家ウィリアム・フリードキンが、自ら惚れ込んだトレイシー・レッツのオフ・ブロードウェイ版『BUG』を原作に『SAW／ソウ』、『HOSTEL／ホステル』のライオンズ・ゲート社と組み、さらに激しく強烈な作家性を爆発させたのが本作『BUG／バグ』だ」と書かれると、こりゃ観ておかなければ……。

なぜ、アグネスはモーテルに？

この映画の舞台はアメリカのオクラホマ州郊外。そして、主に物語が展開するのは、アグネス・ホワイト（アシュレイ・ジャッド）が一人暮らしをしている、とあるモーテルの部屋の中。アグネスは最近仮釈放されたという元夫ジェリー・ゴス（ハリリー・コニック・Jr）の暴力から逃れるためここで生活しているわけだが、何度もかかってくる無言電話にイライラ。これは、きっとジェリーからの電話だと確信していたが、さてその真相は……？

数年前に息子を失い心に深い傷を負っているアグネスは今、同じレストランでウェイトレスとして働いている女性R.C（リン・コリンズ）といい仲。つまり、2人は同性愛……。そんなアグネスだから、R.Cは安心して友人のピーター・エバンス（マイケル・シャノン）を紹介したのだが、互いに心の奥底に持っている不安に共鳴もあった（？）アグネスとピーターは次第にいい仲になり、ある夜遂に結ばれることに。

ピーターもヘンなら、ジェリーもヘン……？

ところが、翌朝アグネスが目覚めると、部屋の中にいたのはピーターではなく、何と元夫のジェリー。これにはアグネスはビックリ！ 後述のようにピーターもどこかヘンだが、このジェリーもかなりヘン。シャーシャーと「もう一度やり直そう」と言いつつ、平気でアグネスに暴力をふるうジェリーに、アグネスはお手上げ。

言いたいことを言い、やりたい放題をやった挙げ句、ジェリーは「また戻ってくる」と言い残して出かけていったが、そうなるとピーターがますますアグネスにやさしくなったのは、ある意味当然。その結果、何とも厚かましいことに、ピーターはこのままモーテルでアグネスとの共同生活を続けることに。これには、友人のピーターをアグネスに紹介したことによって、結果的に自分の恋人アグネスを奪われてしまったR.Cはおかんむりだが、なってしまったことは仕方なし。

しかし、ジェリーが帰ってきたら、ひと波乱起こることは必至。さて、その時に向けたアグネスとピーターの対応策は……？

前半は結構まともだが……？

そんな前半のストーリー展開は結構まともで、十分理解可能。もっとも、2人が初

のベッドインを果たす中で、虫の存在を主張し、それを探し始めるピーターの姿はかなりヘン。アグネスが少しでもまともな神経であれば、こんなヘンな男ピーターとベッドを共にすることはなかったはずだが、ジェリーへの恐怖心から誰かに頼りたかった女心としては仕方なし……？

他方、ある事情で3年間もご無沙汰だったと言うピーターのセックスはすごくたくましかったようで、アグネスは大満足……？ すると、ピーターはなぜ3年間もセックスを絶っていたの……？ そんな質問に答える形で、ピーターの口から少しずつ語られていく秘密とは……？ ここらあたりから、この映画の妄想が暴走し始めることに……。

坂和弁護士が語るアシュレイ・ジャッド論

この映画でアグネス役を演じるアシュレイ・ジャッドは、『評決のとき』(96年)、『コレクター』(97年)、『氷の接吻』(99年)などで名前と顔を知っていた女優。また、それに続く『ダブル・ジョパディー』(99年)で、彼女の美貌と名前はしっかり私の頭の中にインプット。

『ダブル・ジョパディー』では、前半の刑務所服役中はその魅力を隠していたが、仮釈放後、黒のアルマーニのドレスをカッコよく決めた美女ぶりは絶品だった(『シネマルーム1』38頁参照)。

また、その後の『五線譜のラブレッター』(04年)での「堂々とした歌いぶりは見事なもの」だった(『シネマルーム6』140頁参照)。しかし、『ツイステッド』(04年)では「それなりの役をもらい、それなりの演技をしているのだが、私にとってはやっぱり、『ダブル・ジョパディー』のアシュレイ・ジャッドが最も印象強い。たくさんの作品に恵まれ、演技力のしっかりした美人女優なのだから、私としては、もうひと皮むけて、私の大好きなニコール・キッドマンのように大ブレイクしてほしいと願っているのだが……」と書いた(『シネマルーム6』270頁参照)が、そんなアシュレイ・ジャッドが……？

アシュレイ・ジャッドの熱演にビックリ！

そんな私の大好きな美人女優アシュレイ・ジャッドが、『BUG／バグ』の後半はものすごい熱演を見せてくれるので、それに注目！ そんな熱演ぶりを見ていると、

『BUG／バグ』はもともとニューヨークのオフ・ブロードウェイの舞台上演されていた「密室劇」だということがよくわかる。

映画後半、モーテルの部屋は虫を封じ込めるため(?)ピーターとアグネスの手によって異様な内装が施されている。そんな奇妙な部屋の中で、アシュレイ・ジャッドは髪を振り乱しながら血まみれ状態でわめきまくるから、観ている方は大変。しかも、妄想が頂点に達した2人は、自らの身体の中に入っている虫を退治するべく、ある行動に及ぶのだがこんなものあり……? もっとも私が注目したのは、そこで彼女が見せてくれるオールヌードの姿。

本来それが注目点ではないのだが、どうしても私の目はそこに。もっとも、せっかくアシュレイ・ジャッドのヌード姿を拝めるのなら、こんな妄想と狂気が渦巻く中ではなく、しっとりとした色気たっぷりの雰囲気をお願いしたかったが、このストーリーではそれは所詮ムリ!

血液を餌に? 人体に寄生?

「ある事情でボクはセックスはダメなんだ」と言うような男に限って、ラブホテルに入ってみると精力絶倫だった。『シネマルーム』ファンの女性の中には、そんな経験を持った女性もいるのでは……? どうもピーターはそんな男だったらしい。いざベッドに入ってみると、その方面の満足度はピカイチだったようだし、裸になると隆々たる胸や上腕の筋肉は立派なもの。なぜ、ピーターはこんな肉体美を……? それはきっと彼が元軍隊にいたから。そう考えるのが妥当だが、ピーターがアグネスに語った秘密とはまさにそれ。

しかし、彼の説明は「湾岸戦争の時、自分は人体実験のための実験台とされ、軍医からある薬を注入された。そのため逃げ出したが、軍は今自分を必死で探している」というワケのわからない支離滅裂なものだった。そのうえ、アグネスの目には全然見えない「虫」がいると主張していた前半の「ヘン度」は後半さらにエスカレートし、ピーターは自分の血液を取り出して顕微鏡で虫の生息状況を調べているから、ちょっと気味が悪い。ピーターの説明によれば、「バグは俺の血を餌にしている」「バグは俺の身体に寄生している」と言うのだが、なぜアグネスはこんな風に暴走するピーターの妄想と狂気を信じたの……? それは、アグネス自身にも同じ妄想が生まれ、ピーターと同じようにそれが暴走し始めたということ……?

ウィリアム・フリードキン監督が描く、「人間が人間でいられなくなる」状況はたしかに恐いが、さてそれに対するあなたの評価は……？

『キネマ旬報』の採点は？

『キネマ旬報』7月下旬号の「REVIEW 2008 Part 2」は、4氏が『BUG／バグ』を取りあげているが、その採点は2 + 2 + 1 + 2 = 7点と低く、批評も厳しい文章がズラリ。とりわけ、1点をつけた塩田時敏氏は、「原案は舞台劇だというのが、この錯乱劇なら、もっと気合いの入った本格派の“電波系”の監督で観たかった」と手厳しい。

さて、ウィリアム・フリードキン監督は、こんな批評に対していかなる反論を……？

2008(平成20)年7月12日記

ミニコラム

腹が立つ！ その1——これでもひき逃げだけ？

08年10月21日大阪市北区で何ともむごいひき逃げ事件が発生した。これは会社員のSさんが黒ワゴン車にはねられたうえ、約3 kmも引きずられて死亡した事件。現場にはタイヤ痕が残っているうえ目撃情報や防犯ビデオの記録もあるから、加害車両とその運転手の割り出しは時間の問題だろう。

そこで問題は、その罪は自動車運転過失致死とひき逃げだけ？ 危険運転致死罪の適用はムリだろうが、焦点は「ひき逃げ」という道路交通法違反ではなく、殺人罪適用の可否。ひいた時点で直ちに救護措置をとっていればS

さんは死亡しなかったかもしれないのに、約3 kmも引きずったことによって死亡させたのは殺人罪ではないの？ 多くの国民感情はそうだろう。

①01年12月の危険運転致死傷罪の創設、②07年5月の自動車運転過失致死傷罪の創設、③道路交通法改正による酒酔い、酒気帯び、ひき逃げ等の法定刑のアップ、という交通事故加害者への厳罰化の流れは一段落したが、現実にはこんな悲惨な事件が頻繁に起きている。今後の捜査の推移に注目したい。

2008(平成20)年10月25日記